

奥の細道むすびの地「大垣」 十六万市民投句

一般の部

令和三年度九月 入賞句一覧

投句数 四百五十三句

名和 永山 選



持選

門火焚く兄の所作には父のあり

大垣市

田口 貞善

「門火」は、盂蘭盆の時、死者の靈魂を迎え送るために焚く火である。「兄の所作には父のあり」で、亡くなったたであらう父が当然想像できる。一般には亡き父を「考」と書くが、ここでは「父」と記されていることから、まだ詠者の中には父が生きているのである。それは、「兄の所作」からも、父と同じ身のこなしや振る舞いをうかがうことで、今なお父とともに生きていると。

日もすがら鉤引く音涼新た

養老郡養老町

田中 紫香

秋がやってきて、爽やかな季節。空気も澄みわたり、青空が広がる。季語「涼新た」には、秋のやってきた素晴らしい季節をつつみ込むのである。「日もすがら鉤引く音」と一日中、あの鉤を引く勢いと爽やかな音、また鉤屑の匂いまで伝わってきた。

三層の雲の天辺大夕焼

大垣市

立川 昌子

夕焼けと雲の色の句はたくさんある。「雲一面が赤となる」「雲を染めゆく大夕焼」は類想となる、しかし掲句は「三層の雲の天辺」と新たな発見を詠んでいる。雲が何重にもなっている「その天辺が」というのである。確かに、夕焼けに染まる雲は「雲の端」が色濃く染まっている。対象をよく観察し、「色」を記さずに、読者に色を想像させているのである。

秀逸

線香花火の玉落ちて闇もどる

大垣市

松岡 みつ

風鈴に百の音色や一つ買ふ

東京都世田谷区

関戸 信治

虫時雨闇を大きくふくらます

大垣市

新町 恵子

髪結ぶ今日より夏の女なり

大垣市

柏瀬 澄子

迎え火や我が家のルーツ語る父

大垣市

大原 巖

泣く蟬を古木ささえし残る日を

大垣市

土屋 和馬

放牛の乳房にかるる草の花

安八郡輪之内町

野村 照子

点滅の止まぬ門灯残暑かな

三重県四日市市

後藤 允孝

問はずおく胡瓜を刻むこの破調

安八郡神戸町

高橋 泰

嬰に母もまどろみ団扇風

大垣市

早筈 千恵子

入選

蟬のゐる木に忍び寄るたも持つ子

大垣市

北村 陽子

箸止めて黙禱に入る原爆忌

大垣市

北浦 典子

ひとしきり母を呼ぶ声落とし文

養老郡養老町

佐藤 咲楽

炎帝や線路ゆらゆら交はらず

大垣市

立川 昌子

梵鐘の音のたゆたふ秋隣

大垣市

吉田 てるみ

雨乞いに雷の音ばかりなり

東京都狛江市

椎野 一恵

蝸やついに隣家も空家なり

大垣市

杉山 はるみ

空蟬や墓石にすぎり世にいでて

不破郡垂井町

傍島 法苑

涼しげに泳ぐ金魚のワルツかな

大垣市

石垣 珠泉

名水に触るる齒応え心太

岐阜市

花川 和久

睡蓮を分けゆく鯉の大き口

大垣市

川瀬 貞枝

光ごと朝採りの茄子手に受くる

福井県敦賀市

山田 美千代

ひとり身の二度寝許さる野分過ぐ

大垣市

中山 テル子

手を伸ばしパラバスケツト秋高く

大垣市

娑 婆

糸瓜忌や俳句講座の開講日

兵庫県神戸市

岸下 庄二

極めつけおらが在所の唐辛子

神奈川県川崎市

立野 音思

打水の下駄音鳴りぬ裏小路

愛知県瀬戸市

宮崎 諭志

蟬しぐれ勝手気ままな合唱団

大垣市

高津 喜久子

迎火や「早くおいで」と門に立つ

大垣市

森 茂寿

伝へ合ふ命の重み八月来

揖斐郡大野町

藤田 涼子

選者吟

祠あり句碑ある美濃路秋晴るる

永山



一般の部